Osaka University Knowledge Archive

Title	スピノザにおける《内在》の論理
Author(s)	堀江, 剛
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/376
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	堀　江　　剛（ほり え つよし）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１８０７６　号
学位授与年月日	平成 15 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**スピノザにおける《内在》の論理**
論文審査委員	（主査） 教　授　鷲田　清一 （副査） 教　授　中岡　成文　　講　師　本間　直樹

論文内容の要旨

本論文は、システム論的な把握を助けに、スピノザの《内在》の論理を現代に通用する理論として、一貫して読み解こうというものである。

序論では、スピノザの『知性改善論』と『エチカ』に基づいてそこに貫かれる《内在》の論理を明らかにするという、本論文の意図が示される。自然と事物とを外在的に関係させ、その関係を固定化することをスピノザの理論的機構は許さない。本論文では、1. 生活→知性（第１部「生活と方法」）、2. 知性→自然（第２部「自然の構成」）、3. 自然→生活（第３部「感情と倫理」）という、３つの《内在》様相の移動が示される。

第１部「生活と方法」では、青年スピノザが体験した生活上の転回が描写される。スピノザは人間の価値追求を分析し、善の概念を新しく定義するが、それは“善く生きるとは、とにかく生きることである”とでも表現できるような、自己言及的な定義である。

第２部「自然の構成」では、「一つの属性を持つ実体はただ一つしか存在しない」という定理から出発して、属性概念について立ち入った検討がなされ、「内在的現場」という注目すべきコンセプトが提示される。個々の言明がなされる当の場面に即して考え、基体と性質との通常の二分法を避けるというやり方により、スピノザの実体－属性概念の意義が解釈される。

第３部「感情と倫理」は、心身変容というテーマから出発する。スピノザは人間の認識を三種に分類したが、申請者がここで注意を向けるのは第二種の認識である。というのも、それは表象と知性との間にあって、いわば両者を橋渡しする秩序・連結の様式だからである。人間の活動（行為）を意志の絶対的・規範的命令に従わせるタイプの倫理学とは異なり、スピノザの倫理学は規範の規範性を批判しつつ、前述のように善や徳の概念を再定義し、そこに共通概念としての理性の指図を展開した。それは、差異＝ズレを無視し、反省的な自己意識の透明性を疑わない近代主観哲学と鮮やかな対照をなすとされる。

最後に「結論」では、スピノザには三種の内在があることを改めて確認している。すなわち、1. 真偽の差異を自ら知る知としての「知る」内在（知性の自己明示性）、2. すべての事物とともに自らを生み出す神＝自然（自然の自己産出性）、3. 諸々の不確かさのただ中で‘とにかく’「生きる＝生活する」領域としての感情（感情の自己関係性）であり、これらはそれぞれ固有の位相を持ちつつも、相互に入れ子状になっているのである。

論文審査の結果の要旨

スピノザ哲学は「表象」の立場を断罪するあまり、自己完結的、閉鎖的になってしまう危険を秘めている。ジャーゴンのとめどない堂々巡りに陥ってしまいがちなスピノザの基本コンセプト群を、申請者は原テクストを踏まえつつもシステム論の用語を通して可能な限り柔軟に読み解き、現代哲学・思想のアリーナにスピノザを（再）登場させるのにふさわしい装いを与えている。刺激的な「内在的現場」の発想、ならびに「自己原因の概念には、表象の立場を予防するための形式的意義しかない」というきわめて率直な指摘も、スピノザ研究を専門家の手からより広い文脈へと解放するうえで有益であろう。たしかに日本のスピノザ研究者のなかにも申請者と近い立場をとる論者はすでにいるようであるが、申請者は一般的な全体論とは異なり、システム論に示唆された「潜在的」全体論を提起する点で、固有の理論的貢献をしているといえる。このような柔軟な解読は、スピノザ思想と現代の対話方法論（ソクラティク・ダイアローグ）との間の関連性を発見させるのにも一役買っている。

以上のような優れた成果にもかかわらず、若干の疑念が残らないわけではない。「思惟する自己」の問題など、一部スピノザ哲学の基本構図に由来する不明点は、完全に払拭されたとは思われない。スピノザ哲学を再解釈するにあたって、かつてのその最大の「再解釈」者であったヘーゲル、「内在」概念に同じように注目したシェリングやベルクソンによるスピノザ解釈にも言及する必要があったであろう。さらにまた、「作動上の閉じ」の概念など、決定的な箇所に大胆にシステム論的戦略を導入する申請者の方針に、スピノザ研究の内部でも異論が唱えられる可能性はある。システム論研究自体が流動的である現状では、それらのシステム論的概念の理解が本論文で十全になされているかどうかも、疑問の余地無しとしない。以上の点からすると、申請者は「共通概念」のコンセプトの生産性を明らかにしようと腐心している点は高く評価できるものの、その成否はさらにこの先の議論の詰めにかかっているとも言える。

しかし、これらの問題点は、「内在」という、スピノザ哲学の核心とさえ言えるテーマにずばりと切り込み、その理論的含蓄と現代的意義を展開しようとした本論文の優れた成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有する者と認定する。